

冬におすすめの本

姫路市立図書館

小学5・6年生向き
クリスマスの本

『ペッテルとロッタのクリスマス』

エルサ・ベスコフ さく 福音館書店 (E・べ)

ペッテルとロッタは、クリスマスにプレゼントを持ってきてくれたやぎおじさんを、トルプ森へ探しに行きたいと思っていました。ある日、いつもミルクを届けてくれる森の近くの農家のおくさんが来ませんでした。ミルクをもらいに行くことになった二人は、遠回りして森を通り、やぎおじさんを探すことにしました。

『とびきりすてきなクリスマス』

リー・キングマン作 岩波書店 (GYーキ)

セッパラ家は両親と10人きょうだいの大家族です。クリスマスも間近、一番上の兄さんの乗った船が嵐の海で行方不明になってしまい、一家は心配でたまりません。10歳の少年エルッキは、兄さんが用意していた家族へのクリスマスプレゼントの材料を見つけ、代わりにプレゼントを作り始めます。

『パディントンのクリスマス』

マイケル・ボンド作 福音館書店 (GYーボ)

パディントンはブラウンさん一家と暮らしているクマの子です。ブラウン夫妻とパディントン駅で出会ったのでこの名前がつけました。そのいきさつは前巻『くまのパディントン』にのっています。この巻では七つの騒動を巻き起こしますが、そのひとつにクリスマスの買物の話があります。パディントンが、おくりものにする物干しづなを持ったままどンドン歩いたので、つなをあちこちの展示テーブルの脚に巻きつけてしまった話です。でもどの騒ぎも、いつも最後はうまくいきます。

『はじめてのクリスマス・ツリー』

エレナー・エステイス作 岩波書店 (GYーエ)

クリスマス、街中の人々がクリスマスツリーを飾るというのに、マリアンナの家では、お母さんがツリーを飾るのを許してくれません。お母さんは、みんなと同じことをするのが大嫌いなのです。マリアンナは、お母さんを説得しようと、友達のマリーと一緒に捨てられたツリーを何本も家の中庭に運びます。

『クリスマス人形のねがい』

ルーマー・ゴッデン文 岩波書店 (GYーゴ)

クリスマスイブの日、人形のホリーは、自分がかわいがってくれる「わたしのクリスマスの女の子」を待ち望んでいました。その頃、施設で暮らす6歳の女の子アイビーは、空想のおばあちゃんの家をさがして町を歩いていました。アイビーは、おもちゃ屋のウィンドウで「あたしのクリスマス人形」ホリーに出会い、ふたりはそろってねがいごとをします。その時、奇跡が起こります。ねがいごとには強い力がひめられていたのです。

『クルミわりとネズミの王さま』

ホフマン作 岩波書店 (GYーホ)

マリーはクリスマス・イブにドロッセルマイアーおじさまからクルミわり人形をもらいます。その夜、マリーはクルミわり人形が指揮する人形たちとネズミ軍の戦いにまきこまれて大ケガをしてしまいます。お見舞いに来たドロッセルマイアーおじさまは、不思議なお話をしてくれます。ドロッセルマイアー一族の若者が、ネズミの王の魔法にかげられたお姫さまを救おうとしてクルミわり人形にされてしまった——というのです。マリーの助けで、クルミわり人形はネズミの王にうち勝ち、悪い魔法から解き放たれて、もとの美しい若者にもどります。夢と現実が交錯する不思議な物語です。

『サンタ・クロースからの手紙』

J. R. R. トールキン〔作〕 評論社 (E-1)

サンタクロースから子供たちのところへ、毎年手紙が届きます。そこには、なかなか知ることのできないサンタクロースの日常が、描かれています。どじけど憎めない相棒の北極熊のこと、いたずら好きな雪ん子のこと、ゴブリンとの戦いとその行方、そして秘書のイルベレスのことなどです。手紙には、見るだけでわくわくするような絵が、添えられています。

小学5・6年生向き

冬におすすめの本

『森は生きている』

サムイル・マルシャーク作 岩波書店 (98ーマ)

年の暮れ、わがままな女王が、四月に咲くマツユキソウを新年までにご殿へとどけたものには、金貨をやるというおふれを出します。まむすめは、義母とその娘に、ひどいふぶきの中へマツユキソウを取りに行かされます。まむすめは森の中で一月から十二月までの月の精に出会い、四月の精が一時間の間、十二月の精に代わってもらってマツユキソウを摘ませてくれます。“十二のつきのおくりもの”の名で知られる、スロバキアの昔話をもとにした童話劇です。

『風にのってきたメアリー・ポピンズ』

P. L. トラヴァース作 岩波書店 (GYート)

冷たい東風の吹いたある日、桜町通り17番地のバンクス家に、一人の若くて風変わりな女の人がやって来ました。その人の名前はメアリー・ポピンズ。彼女が来てからというもの、バンクス家の子どもたちは退屈している暇はありません。魔法の磁石で一瞬のうちに世界各地を旅したり、動物園の夜の誕生パーティーに呼ばれたり、メアリー・ポピンズの案内する不思議で愉快的冒険の世界を経験します。

『ライオンと魔女』

C. S. ルイス作 岩波書店 (GYール)

4人きょうだいがある日、田舎の古く広大な屋敷の一室にあった大きな衣裳ダンスから、雪の降りつもる不思議な世界に入りこみます。そこは、白い魔女に支配され、永遠に冬の国となっているナルニアという国でした。4人はライオンのアスランとともに、魔女を倒すために戦います。

『牛追いの冬』

マリー・ハムズン作 岩波書店 (GYーハ)

長いお休みがおわり、秋がきて学校がはじまりました。すえっこのマルタはまだ学校へ行ける年ではありませんが、おねえさんのイングリッドといっしょに行きたがりです。エイナールは、生まれたばかりの子牛がクリスマスのごちそうにされないようにある計画をし、おにいさんのオーラは、牛追いをしてお金で、家族へのクリスマスプレゼントと自分の本が買えないかと頭を悩ませています。ノルウェーに暮らす農場一家の秋冬の生活をえがいた物語です。春夏の物語は『小さい牛追い』です。

『妖精ディックのたたかい』

キャサリン・M・ブリッグズ作 岩波書店 (GYーブ)

ディックは、イギリスの「家つき妖精」です。「家つき妖精」というのは、何百年も屋敷にすみついて、家にふさわしいと認める主人や家族を守り、幸運をもたらしてくれる妖精です。この物語は、17世紀中頃にある家族が田舎の古い屋敷に引っ越してくるところからはじまります。当時のイギリスは内乱の時代で、古い貴族階級が没落し新興の商人階級が力をもちはじめていました。屋敷を手に入れたのも、そんな商人の一家でした。ディックの助けで、息子のジョエルと前所有者の家系の最後の一人・アンは結ばれ、屋敷には幸せな日々がおとずれます。超自然の力や伝説への信仰が息づくイギリスらしい物語です。

『ムギと王さま』

エリナー・ファージョン作 岩波書店 (GYーフ)

「ガラスのくじゃく」アナ・マライアと弟のウィリヤムは、クリスマスに何ももらえませんでした。二人は、店のかざり窓で目の保養をし、買い物ごっこをしました。ある日、アナ・マライアは、偶然、たくさんのきれいなガラスのおもちゃで光るクリスマスツリーをもらいました。なかでも、美しいのは青と緑と金色にゆれ動くくじゃくでした。他 27 編。このお話は岩波少年文庫『天国を出ていく』にも入っています。

『グリーン・ノウの子どもたち』

L・M・ボストン作 評論社 (GYーボ)

7才の少年トーリーは、冬休みをおばあさんの元で過ごすことになりました。おばあさんは、グリーン・ノウにある古い屋敷に住んでいます。トーリーは屋敷で過ごすうちに次々と不思議な体験をし、やがて300年も前にグリーン・ノウに住んでいた子どもたちと心を通わせてゆきます。「グリーン・ノウ物語」(全6巻)の第1巻。

『星座をみつけよう』 (知識の本)

H・A・レイ作 福音館書店 (44ーレ)

星のことを知っていれば、星空のすばらしいながめがもっと楽しくなるはず。星の見分け方や星座についてのことを、「おさるのジョージ」シリーズの作者 H・A・レイ氏が、ユーモラスに、時にはクイズをとり入れながら書きました。この本は、大天文台の窓から星空を見たときと同じように描かれてあって、家の中でも外でも、一年中いつでも役にたつことでしょう。

冬におすすめの本

姫路市立図書館

中学生向き

『氷の花たば』

アリソン・アトリー作 岩波書店（GYーア）

吹雪の夜、道に迷ったトムは、霜の結晶の輝く白いマントの男に、命をたすけられました。トムはお礼に、そうとはしらず赤ん坊のローズをやる約束をしてしまいます。ローズは美しい娘になり、トムはいつか約束を忘れました。ある冬の日、スケートに行ったローズの白いコートに、輝く霜におおわれた赤いバラが三本ささっていました。全6編。

『若草物語』

L・M・オールコット作 福音館書店（GYーオ）

南北戦争時代のアメリカ。美しいメグ、男の子みみたいなジョー、家庭的なベス、おしゃれなエイミーの個性豊かな4人の姉妹は、父が戦争に行き、母とくらしています。貧しいながらもお互いを思いやるあたたかい家庭で、4人はいろんな失敗をくりかえしながらも日々成長をとげてゆきます。「プレゼントのないクリスマスなんて・・・」という姉妹のつぶやきで物語は始まりますが、きれいな物や楽しい遊びに目を奪われがちな少女時代を、物ではなく心の美しさに目をむけてゆく4人の姉妹の心の成長が描かれています。長く読みつがれ、今もなお少女の共感をよぶ家庭小説の名作です。この本は岩波書店から『四人の姉妹』という題名でも出版されています。

『見習い物語』

レオン・ガーフィールド作 岩波書店（GYーガ）

産婆の見習い、ブリストアはクリスマス・イブと馬小屋に特別な夢を持っていた。こともあろうに、自分が神の子キリストをみごもることだった。イブの夜、鏡職人の家でお産があった。そこの見習いは親方に気に入られて、お嬢さんと結婚できるように、一生懸命出産を手伝った。でも生まれたのは、後継ぎの男の子だった。失意の中、彼はブリストアに恋心を抱く。過酷な労働の中、自分にとっての幸せを見つけていく、様々な職種の見習い達の物語。

『イシ』

シオドーラ・クローバー作 岩波書店（GYーク）

カリフォルニア・インディアンの一部族、ヤヒ族最後の生き残りとなったイシという実在人物の一生を描いた物語。イシの部族が、どのような生活を送っていたのか、ヤヒ族の言語・信仰・物語・風習、その生き方についてが描かれ、また、イシの目を通して見た白人の世界が書かれています。

『飛ぶ教室』

エーリヒ・ケストナー作 岩波書店（GYーケ）

寄宿舎では、「飛ぶ教室」の準備が進められていました。それは、親に捨てられたヨーニーが書いた戯曲で、貧しいけれど母思いのマルチン、自分は臆病者だと悩むウリー達と、クリスマスのお祝いに体育館で上演するのです。そこには、かつて信頼できる先生がいなかったばかりに苦しみ、生徒が心のなやみを言えるようにこの学校に戻ってきた先生がいました。ドイツの高等中学での物語。

『クリスマス・キャロル』

ディケンズ作 岩波書店 (GYーデ)

クリスマス前夜、欲の皮のつっぱった心の冷たい男スクルージのもとへ鎖を引きずった幽霊が現れます。それは七年前に死んだ仕事の相棒マーレイでした。マーレイはスクルージに自分と同じ運命から逃れる希望と機会を与えるために来たと言うのです。次の晩から3人の幽霊が次々とやってきて、過去・現在・未来をスクルージに見せます。

『星のひとみ』

トペリウス作 岩波書店 (GYート)

クリスマス前夜のこと、トナカイの引くそりにのったラップ人の夫婦は、オオカミの群に追いかけられ、あかんぼを雪の中に落としてしまいます。あかんぼは通りかかったフィンランド人の百姓にひろわれ、「星のひとみ」とよばれるようになります。「星のひとみ」は不思議な力を持っていました。表題作の他、北歐を舞台にした幻想的な物語が10編収められています。

『ほらふき男爵の冒険』

P・ニクル再話 福音館書店 (GYーニ)

ほらふき男爵ミュンヒハウゼンは今日も友人たちを相手に、酒を片手に、様々な話を語ります。今回は、寒いロシアでの旅の話です。ありそうにないのだけれど、想像してみても思わず笑ってしまう、そんな面白い話が、次々と登場します。

『トムは真夜中の庭で』

フィリパ・ピアス作 岩波書店 (GYーピ)

トムは、むかしの大きな邸宅を区切ったアパートに住む親戚にあずけられ、友達もなく退屈しきっていました。真夜中に大時計が十三時を打つのを聞いたトムは、邸宅の裏口から、昼間はなかったはずの庭園に足を踏みいれます。毎晩のように庭園へぬけだすようになったトムは、ヴィクトリア時代のふしぎな少女と友達になります。歴史と幻想が織りなすファンタジー。

『クラバート』

プロイスラー作 偕成社 (GYープ)

みなしごのクラバートは、ある日、夢の中で不思議な声が響くのを聞いた。その声に導かれるままにやってきた所は、人里離れた沼地に建つ水車小屋だった。そこには恐ろしい風貌をした片目の親方と11人の職人が働いており、週に一度カラスに変身して、親方から魔法を伝授してもらっていた。それから一年後の大晦日、頼りにしていた職人頭が謎の死を遂げた。クラバートの心に親方への疑惑が生まれ、それはやがて、親方との生死をかけた対決へと彼を導くことになる。

『レ・ミゼラブル』

ヴィクトル・ユゴー作 岩波書店・福音館書店 (GYーユ)

ジャン・バルジャンは貧しさから盗んだたった一切れのパンにより19年もの間囚人となりました。脱獄後、ミリエル司教から銀の食器を盗みますが、司教の寛大さに人間の良心を知り、実業家として社会的地位を得ると慈善事業に力を注ぎます。クリスマスの夜に孤児のコゼットと出会い、引き取り育てます。コゼットは美しく成長し、マリウスと恋に落ち、結婚しました。ジャン・バルジャンはマリウスに過去を話し、

コゼットの幸福のために距離を置きます。やがて真実を知ったマリウスはジャン・バルジャンの元に駆けつけました。19世紀前半の混乱したフランス社会を背景に人間の心の深淵を雄大に描いた大河小説です。

『長い冬休み』

アーサー・ランサム作 岩波書店 (GYーラ)

冬休み、ディクソン農場にやってきたドロシアとディックのきょうだいは、通信ごっこからウォーカーきょうだいやブラケット姉妹と知りあいます。スケートや犬ぞり、暗号の訓練をしながら、「北極」探検の準備をしていた8人でしたが、探検隊のリーダーでもあるナンシイがおたふく風邪にかかかってしまいます。おかげで短いはずの冬休みが1ヶ月も延びることになります。氷に閉ざされた屋形船を北極探検隊・ナンセンのフラム号に見立てて、探検の準備は進みます。

『ツバメ号とアマゾン号』から始まるシリーズ全12冊の4作目です。

『長い冬』

ローラ・インガルス・ワイルダー作 岩波書店 (GYーワ)

「積もる、すごい雪、くる」とインディアンが言ったとおり、猛吹雪が何カ月も続く長い冬が、サウスダコタ州デスメットの町をおそいました。14才のローラは家の仕事を手伝い、家族で助け合って暮らしていますが、零下40度の日が続く中、食料と燃料も尽き、町も吹雪に閉ざされてしまいます。とうとう最後の小麦を食べてしまった日、二人の若者の勇敢な行動によってインガルス一家は救われます。福音館書店発行『インガルス一家の物語 全5巻』の続編です。

『エンデュアランス号大漂流』 〈ノンフィクション〉

エリザベス・コーディー・キメル著 あすなる書房 (297ーキ)

1914年、アーネスト・シャクルトンのひきいる探検隊は、エンデュアランス（不屈の精神）という名の船に乗って、南極大陸をめざした。しかし氷閉じこめられて漂流、さらに船を失い、氷の世界を1年近くさまよったあとに、全員が奇跡の生還を果たした。どんな困難におそわれても、けっして希望を失わず、強靱な意志の力でのりこえたシャクルトン隊の偉大な失敗の記録。

『雪は天からの手紙 中谷宇吉郎エッセイ集』 〈科学エッセイ〉

池内 了編 岩波書店 (40ーナ)

「雪は資源である」という言葉を残した、雪の結晶の研究で有名な実験物理学者の随筆（エッセイ）集。北海道十勝岳で雪の結晶を採集して観察し、美しい結晶を人工的に作り出すことに成功するまでの実験の経過や、寺田寅彦や湯川秀樹などの科学者との交流、茶碗から上がる湯気についての科学的考察、透視や念写などの超科学についての考察などが興味深く書かれています。最後の章では高校生が行った霜柱の研究に感心し、専門的な知識がなくても、現象に対して持つ興味の純粹さが、研究に不可欠な「直感的な推理」を働かせ、立派な研究ができると述べています。